

発行所 福島市柳町4-29  
郵便番号 960-8648  
福島民友新聞社  
電話代表(024)523-1191  
編集局(024)523-1390  
販売局(024)523-1472  
振替口座 02180-8-5070

©福島民友新聞社 2020

2020年(令和2年)

3月5日(木曜日)

旧暦2月11日 赤口 五黄

啓蟄

福島民友

福

THE

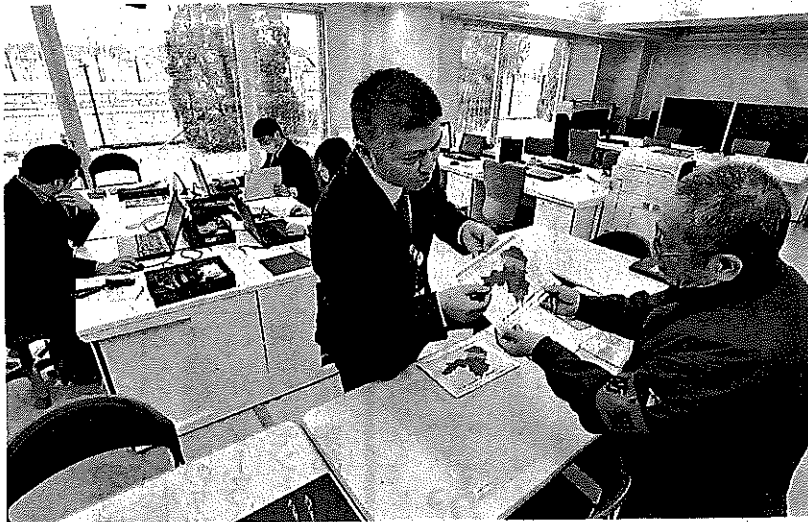
# 双葉町役場 連絡所開所

## 一部業務 古里で9年ぶり再開

東京電力福島第一原発事故に伴う避難指示の一部が初めて先行解除された双葉町は4日、JR双葉駅に隣接する町コミュニティセンターに町役場の連絡所を開所した。震災と原発事故から約9年ぶりに、町内で役場業務の一部を再開した。【3面に関連記事】

コミュニティセンターで行われた開所式で、伊沢史朗町長が「一部ではあるが、ようやく避難指示の解除が実現した。古里へ役場機能の一部を戻すことができ、万感の思い」とあいさつ。佐々木清一町議会議長は「避難指示が解除されるとは夢にも思わなかった。連絡所が町民や来訪者の助けになれば」と願った。

伊沢町長と佐々木議長が連絡所の看板を設置。町職員が、住民票や被災証明書



避難指示の先行解除に合わせ、町コミュニティセンターに開所した町役場の連絡所。震災と原発事故から約9年ぶりに町内で役場業務の一部が再開した＝4日午前、双葉町長塚

などの申請の受け付けと交付、一時立ち入りの支援、個人線量計の貸し出しなどの業務に就いた。

4日午前0時の先行解除と同時に、帰還困難区域の

うち、再び人が住めるように整備する特定復興再生拠点区域(復興拠点)全域への立ち入り規制が緩和され、自由に出入りできるようになった。

5年ほど前から町内の防犯パトロールに当たっている木幡照夫さん(78)は「一部解除でも個人的には喜んでいる。これから復興が進む。しっかりとパトロールしていきたい」と気持ちを新たにしていた。

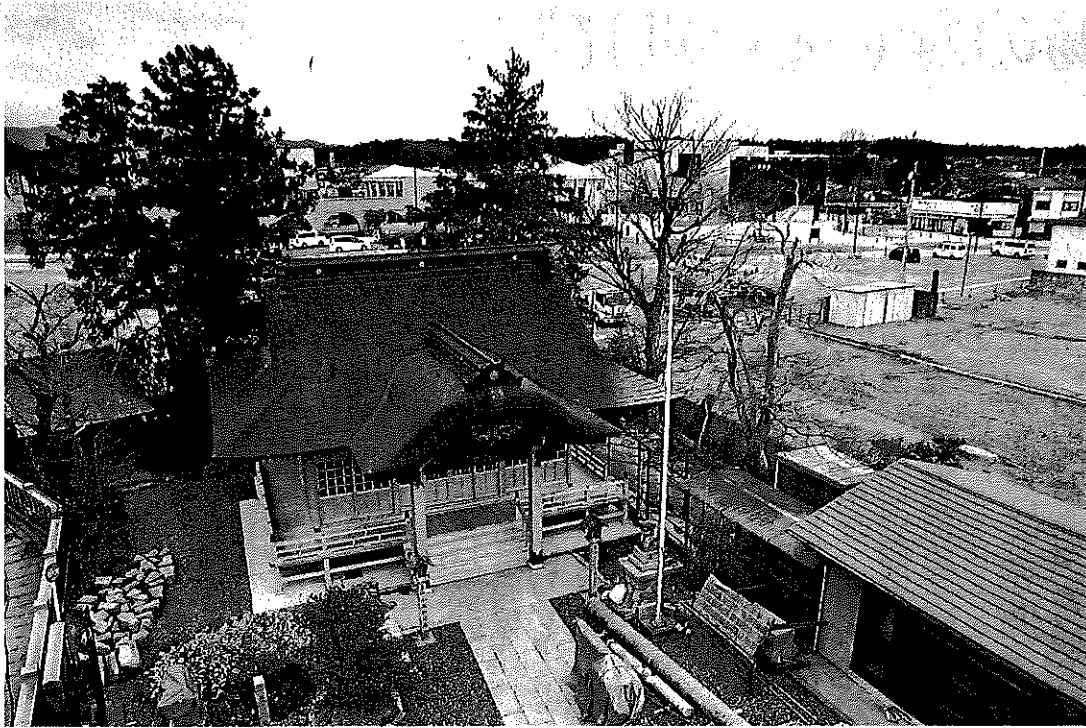
町は復興拠点全域の解除と居住開始の目標を2022年春に設定。伊沢町長は

報道陣の取材に「先行解除は復興の具現化の始まり。戻る人たちが住んで良かった、戻らない人たちにもいい町だと思ってもらえるよう取り組みたい」と語った。

先行解除されたのは町の面積全体の4・6%にとどまる。復興拠点を除く帰還困難区域の避難指示解除の見通しは立っていない。

復興拠点内に自由に入出りできるようになった双葉町。初発神社や双葉駅(写真奥)など町のシンボルの再生が少しずつ進むが、復興まちづくりは緒に就いたばかりだ=4日

# 「新しい町」へ一歩



## 双葉町役場連絡所開所

4日に避難指示の一部が解除された双葉町。JR双葉駅隣に同日開所した町役場コミュニティセンター



双葉町役場コミュニティセンター連絡所の看板を設置する伊沢史朗町長と佐々木清一議長  
4日午前、双葉町

連絡所にはまばらだが、早速訪れる町民らの姿が見られた。医療機関や商業施設の整備、さらなる線量低減化など住民帰還に向けた課題は多く「住民が帰りたくなるような町にしてほしい」と切実な声が上がった。

### 【一面に本記】

元町職員という郡山市の行政書士松枝智之さん(48)は町の様子を見に、約4年ぶりに訪れた。連絡所内で

将来の帰還に向けた情報収集のため連絡所を訪れた、西郷村に避難している介護施設職員志賀隆貞さん(70)は「自分でも不思議だがこんなに郷土愛があると、思っていなかった」と古里への思いを口にする。帰還困難区域の一部解除は「希望、生きる勇気が湧いた」と歓迎する。一方、浜野地区にあった自宅は震災による津波で流された。JR双葉駅西側に整備予定の分譲地に関心を持つが、「住むには医療機関など必要だ」と指摘する。「同じような町はできない。原発事故前以上の新しい町にしてほしい」と語った。

# 待ちわびた古里の地

## 震災9年 原発事故

### 全町避難一部解除の双葉

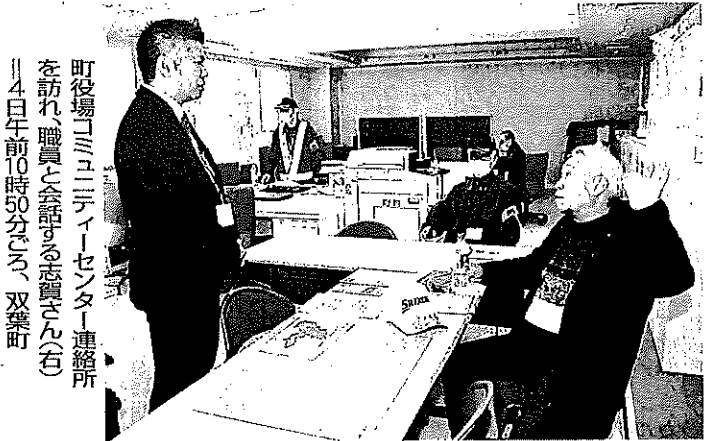
# にぎわいつくりたい

東京電力福島第一原発事故に伴い、全町避難が続いていた双葉町の一部で避難指示が解除された四日、古里の地を踏みしめた町民や町職員から喜びの声が上がった。五日には大熊町で特定復興再生拠点区域（復興拠点）の

JR大野駅周辺の避難指示が解除され、町内大川原地区の住民は利便性が高まると期待した。東日本大震災と原発事故から間もなく九年。住民帰還の促進に向け、町民は新たなまちづくりによる地域再生を誓った。



避難指示が解除されたばかりの双葉駅を訪れ、笑顔を見せる石上さん＝4日午前7時50分ごろ、双葉町



町役場「コミュニティセンター」連絡所を訪れ、職員と会話する志賀さん(右)＝4日午前10時50分ごろ、双葉町

双葉町のまちづくり会社「ふたばプロジェクト」事務局長の石上崇さん(左)は四日午前

来たか。許可証なしで自由に古里に帰れるって、いいね」と込み上げる思いを語った。町職員としてふたばプロジェクトに向向している。震災発生時は仙台市の東北経済産業局に出向中で、二年間の出向を終えて町に戻ると決めた。原発事故の影響で、町内に新築した自宅には一度も住んでいない。「起きたことはしょうがない。前に進むしかない」と町復興に力を尽くしてきた。

町役場「コミュニティセンター」連絡所で、初日の勤務に当たった町総務課の井戸川俊さん(三)は「町民に町とのつながりを感じてもらえるよう、業務に励む」と決意した。

と町の再生に意欲を見せる。一部地域の避難指示解除により、パルクードなどの物理的な壁が開放され、避難指示という「見えない壁」も取り払われた。今後町は二〇二二(令和四)年春の住民帰還開始の目標に向け、新たなまちづくりを進める。

福島民報社は四日、双葉町での町役場の九年ぶりの業務再開を伝える号外を発行し、町内の町役場「コミュニティセンター」連絡所、いわき市の町役場いわき事務所、復興公営住宅勿来酒井団地で配布した。